噎ぶように薫る男の娘達の花

R18
Adult Only

著：きいろいねこ
絵：ちょいもず

噎ぶように薫る
男の娘達の花

男の娘♡喘ぎ／お耽美短編集

オークルベージュのファンデーションを軽くはたき、顔色を整える。眉は普段学校へ行くときは、意志と行動力をより意識して示すように太めに濃く書くのだが、今日は目的が違う。挑発的に茶色のアイブローで、眉頭から眉尻まで細く薄めに描いた。

次はアイシャドウ。いつもは使った事もないようなターコイズブルーを選ぶ。伏し目がちにすると、ブルーの瞼は我ながらドキッとするほど官能的に見える。

――松崎詩織

鏡の中の自分に欲情し、自慰をしてしまう男の娘の話♡

三月も下旬。暖かな日々が続き、今年の春は桜も咲き出している。

三年間の高校生活は勉強と部活、それとバイトに遊びにと明け暮れた。光陰矢のごとしとはよく言ったものだと思う。

それぞれの思い出はまだ脳裏に焼き付いていて、楽しかった学校生活と別れを告げるのは寂しいものがある。でも、自分の場合は解放感、好きなように生きていけるという、解き放たれた心の軽さのほうが大きく感じる。自分らしさを伸ばしていけるのが何より楽しみに思う。

僕は男の娘。自分で男の娘って言うのもなにか面はゆさはあるけど。外見や内面も含めて女性のように振る舞うのが男の娘なのだとしたら、僕はどこまで〝らしく〟できているのかなと考える事もある。

趣味として女装をするのを女装男子と表現するのであれば、男の娘と女装男子の間くらいにいるのが僕なのかもしれない。かわいくありたいと思うし、女の子らしいものの考え方に触れるといいなって、自分もそういう風な感受性が欲しいと感じてしまうから。

おちんちんが勃起する事には違和感を覚えないし、嫌悪する気持ちも湧かない。それに、女の子を綺麗だとか可愛いと思う気持ちも変わらないから、恋愛対象は女性なのだと思う。だから、性自認は普通の男性なのかなと考えている。

普通と違う点を挙げると、女性だけが対象という訳ではなくて、女装する男性、男の娘の事も好きになる事だろうか。えっちをする時はどんなプレイになるのか考えると、股間がムズムズとしてしまう。相手に気持ちよくなってもらいながら、我慢ができなくて自分まで一緒に気持ちよくなってしまうとか、そういうシーンを妄想する。

恋愛感情とまではいかないけど、えっちする事には抵抗を感じないと言えばいいのかな。

男の娘を描いた漫画をオナニーのおかずに使う事もよくあるし、三次元の世界にもその嗜好が浸食してきつつある。

いけない、想像していたら少し固くなってしまった……。

かわいい男の娘といちゃいちゃしてたいなあ。

自慰行為は好き。かなり好き。他人と比べた事はないから、程度は分からないけど。

同級生の男子とそういう話題になった時は、まあ人並かなとか、無難な答えに終始していた。実際は、女性と違って女の子の日というものがないからか、欲に任せてついつい触ってしまう日々。

おねえちゃんのしてる時の声もよく聞こえてくるという事もあって、僕達姉妹、性欲が強いのは似ているのかもしれない。お互い、刺激を与え合っているのは否めないような。僕もしている時に声が出てしまう時があるし。

おねえちゃんは酒に酔うとだらしない所があるから、一線を踏み越えてしまいそうになることもある。ボディタッチが多くなって、怪しげな所に手を置いたり、胸を押し当てるように腕を組んできたり。まあ、おねえちゃんのせいだけではないのが正直なところかも。僕だって男の娘だもん……。

僕は、小さな頃からおねえちゃんに懐いていたと聞かされているし、おねえちゃんも僕のことを猫可愛がりしていたような気もする。

おねえちゃんは時折えっちな事を言っては僕を弄って楽しんでいるフシがあるし、お互いオナバレも何度か経験してる仲だから、その気になれば、ハードルは低い予感がしている。

いや、低いどころか、高さは小学生の障害物競走並、という気も。

鏡の中に映っている自分をかわいいと思えるのは幸せだと思う。父もおねえちゃんも口を揃えて僕のことを母親似だと言う。写真立ての家族写真は、僕がまだ幼稚園児だった頃のもので、パッチリとした二重の美人が涼やかに微笑んでいた。

母はまだまだ健在ではあるけど、女性としての外見的ピークはこの頃だったと思う。

母から受け継いだ資質と、中性的な顔つきだった事に加え、高校からは髪をのばし始めて、今は肩に触れるくらいまで伸びているから、加工無しの写真でも女の子と遜色ないかも？　とうぬぼれてみたりもする。実際かわいい……。

おねえちゃんと商店街に出た時など、妹さんかと問われることが多く、照れくさくてにやけてしまう。おねえちゃんに手ほどきを受けた化粧のテクニックを施すとうっとりとして、長い時間、鏡とにらめっこしていて、はっと我に帰る。

鏡の中のもう一人の自分に恋し、欲情してしまうくらいだ。こういうのを、ナルシシズムというのだろう。

唇が触れるくらいまで姿を近づけ、それからそっと鏡にキスしてみる。鏡の唇と自分の唇が触れる瞬間、えも言われぬ気持ちが僕を支配する。

鏡が息で曇って、自分の顔がよく見えなくなるのが、なんというか、秘密の花園感を増していく……。そして、ひんやりとしたガラスの感覚が、自分をこの世界へと引き戻す。

ああ、男の娘同士のキスってあったかくて倒錯的で、たまらないんだろうな。

自分が客観的に、どれだけ女の子になりきれているかを図る尺度として、パス度というのがあると思う。誰がどう見ても女の子にしか見えない場合は完パス、などという。

レジカウンターに行った時、客が男女どちらかというボタンで女性ボタンを押される。女の子達の中で不自然なく女の子として振る

舞えるという事。レディースのショップで服や下着などを選ぶ時に空気のようにいられるか。トイレで用を足す時に不審な目をされない、等々。

もっとも、パス度が高い女装をしている時に男子トイレに入ると、ギョッとした目で見られてしまうと思うから、あくまでも女性にうまく溶け込めるかという尺度ではあると個人的には思うけれど。長く伸ばした地毛で、女の子っぽい顔立ちだと、男湯に入る時に好奇の視線に晒されてしまうというのもあるしね。

男性が女性の施設を利用する事に関しては、特に女性に否定的な意見が多いと思う。だけど、客観的に女の子だと思われている容姿のまま、男子トイレで立ちションを始めるとジロジロと見られるし、下手をするとあれこれ声をかけられて揶揄われる目にも遭うから、やむを得ず、女子トイレを使う事もあると思う。

女子トイレであれば、個室の中での事でもあるし、よほど問題となる行動（のぞきなどのわいせつ行為）を起こさなければ大丈夫だろうと考えている。

化粧室の鏡越しに、女性とよく目が合う事があるけれど、敵意を持った視線ではなくて、好意的な感じが多いと思うから、女の子の目から見ても、僕は女の子の一員として見て貰えているのだと思う事にしている。何事もポジティブに、自信を持っていることが大事。

もちろん、公衆浴場に入るなんて事は御法度だ。やっていいことと悪い事がある。僕はそのあたりの欲望は全くないし、心は女だと言って、女の子の聖域に土足で入り込む気持ちはない。おしっこがしたいから少しだけお邪魔します……と、なるべく空いている穴場のトイレをこっそりと使わせてもらう。いいよね……？

今はおねえちゃんの部屋にいる。ドレッサーを借りてお化粧をしている最中。

陽夏（ひなつ）おねえちゃんは百貨店に勤務するビューティーアドバイザーで、中学、高校に通っていた時には、よくお化粧の練習台にされた。

色々試したりされているうちに、「自分でもできるように練習してみなよ」と言われ、見様見真似でやり始めたのがメイクをするようになったきっかけ。

おねえちゃんはそれを生業にしているだけに、人を褒めそやすのが上手く、その気にさせるのが昔からの得意技だ。

大体思っていた風に仕上がって満足。目や眉、チークなども上手くいった。

ポイントメイクは及第点だ。盛れた！　ってやつ。テンションが上がる。

最後にグロスを塗り、口紅を注意深く引いていく。

お化粧をしている時は、いつも胸がドキドキするし、恥ずかしいけどおちんちんも少し反応してしまう。今も少しむずむずしちゃってる。興が乗ってくると、目をとろんとさせて、キスをせがむ表情を演じてみたりもする。

おねえちゃんの練習台になっている時は、「はい、できあがり♡」

と言われて鏡を覗くのが楽しみだった。少しずつ女の子らしさを纏っていく過程が堪らなく好きなんだと思う。

着ているお洋服は、制服ライクなグレーのトップス。挑発的なV字のネックラインに、胸元で結んだ黒リボンが愛らしい。

ボトムスは、ネットで見ていて一目惚れしたミニスカート。白地で、光の当たり方で薄い虹色にも見えるプリーツスカートだ。裾に入った黒の二重ラインがお気に入り。それに、黒のニーハイを合わせてみた。

身じろぎした時に、生地が太ももに擦れる感覚が変に高ぶった気分にさせる。この、ミニスカならではの感触が好きだ。

道具を持ち替えたり片付けたりする時などに、内またを少しさすって高めていく事はよくある。鏡でアイメイクを確認しながら、左手で右の胸を弄ってみた。

もしこの部屋に定点カメラなどが設置されていたら、さぞかし恥ずかしい弟の行動が記録されてしまっている事だろう。

乳首は触る前からしっかりとした固さが保たれていた。下着に擦れていたのが、既に感じられていたから。

おちんちんはもちろん、手で触れる前から状態は分かっていたけれど、実際軽く触ると腰のあたりが鈍く痺れるような疼きが上がってきて、お尻が浮いてしまいそうになる。

切ない……。

今は、進学先の学校の入学式までの間の春休み中で、おねえちゃんは出かけている。家には一人だ。

家賃や食費がきついからと言って、僕はおねえちゃんと同居生活を送ることに決めたのだった。

「あなたにも友達付き合いとかあるでしょう?」と、両親は僕達に対して難しい顔をしていたけど、おねえちゃんは「そんなの家族ぐるみで付き合うから問題ないよ!」と言ってくれた。

彼氏を作るつもりも今は全くないらしい。

彼氏ができたらその時はその時だ。心地よい時間を作ってくれる間は一緒に暮らしていたい。

おねえちゃんの仕事は日中で、その間は家を空ける。春休みの今は、留守番をしたり、女装してその辺をぶらぶら散歩して楽しんだり。春の陽気は心をうきうきさせる。

今日は特にお出かけの予定はなかったけど、メイクの練習はいくらしてもやり過ぎという事はないと思っているから……。それに自分がかわいくてドキドキして、自身に欲情みたいな事になるの、好きだし。

僕は頬が熱くなっている事に気付いた。チーク、そんなに濃くしたつもりはないのにな。もしかして、肌が紅くなってしまっているのかな。なんだか身体が火照ってぽかぽかとしている気もする。

おちんちんはこんなに形がしっかりしてきてる……。

『ふふ、本当に女の子みたい♡　千秋は本当にかわいいなあ♡』

僕は鏡に映った自分自身に心の中で囁いていた。自然に出た言葉だった。顔がよく盛れた時など、自分とよく会話をしてしまう。僕

だけなのだろうか。だとするとかなり恥ずかしい。
「えー、なにいきなり。私にそんな事言っても何にも出ないよー」
もう一人の自分はかまととぶって答える役割。うぶでかわいい、可憐な女の子。
女声を出せるようになりたくて、高校生の頃から通っているボイストレーニングの教室があるのだけど、そこで講師をしている先生にも太鼓判を押してもらえるくらい、僕は女声が上達しているらしい。スマホを使って声を再生してみると、男くささが取れていて、確かにかわいいと自分でも思う。
普通に女声を出せるようになってきてからは、こういう、自作自演的な行動にはまってしまったのだった。
鏡の中の僕は、額面通りに受け取るつもりはないとアピールしつつも、満更でもない様子。
褒められて嫌がる子などいないのだ。
目は口ほどに物を言うというやつだろうか。大きく開いた瞳孔は潤んでいて、こちらを上目遣いで見つめている。
僕はたまらなくなって自分で自分を抱きしめる。
自演でここまでやるのってイタいだろうなと思いつつ、こんな所、誰にも見せられないと考えながらも止まらない。これはいつもの儀式なのだった。
両手の力をもう少しだけ強く込め、自身を抱きすくめる。
『くすっ、ぎゅう……♡　やわらかくて心地良い。ねえ、千秋♡』
「ちょっ、やだあ、なにいきなりっ、ちょっとお」
抱きしめた両腕の中で、身を捩らせる女声の〝私〟。
『すきだよ、千秋』
「もう、だ、だめだってば！　今お化粧してたのにい……じゃ、邪魔しないでよねっ」
『すきって言って♡』
お尻を撫でながら、〝私〟からの好きを聞きたくて、催促する。
「んもうっ、す――――すきだよ♡　もう、これでいいでしょう？　よかったら……ちょ、ちょっとお……!!」
僕は我慢できなくなって、自分自身の胸へと手を移動させる。
服の上からでも乳首がコリッとしているのが分かる。
『カリカリ……こんなに固くしちゃって♡　どういう事なのかなあ千秋い♡』
「し、知らないいっ♡　君が、そんな風にすり寄ってくるから、へ、変になっちゃうじゃん！　とっ、鳥肌と同じようなもんだもんっ♡」
親指と人差し指でそっとつまんで、優しくもみ合わせるように動かしたり、人差し指で弾くように先端へと刺激を加えたり。弱い場所を責められるたび、電流が走ったように身体を海老反らせてしまう。自然、吐息が蕩け、甘やかなものとなっていく――。
『こういうの、好きでしょー？』
「ぃや、ふぅうん……♡　だ、だめだってばあ♡　ああっ♡　君ってば、いつもこんな事しか考えてない、でしょ……んんっ♡♡」
『千秋がこんなにえっちでかわいくなかったら、僕だってもう少しはマシになれるのになあ♡　こんなえっちな身体、誘っているよう

なものでしょ♡♡　我慢なんてできる訳ないじゃん～♡　千秋の事を考えると、ばかになっちゃう♡♡』

コンディショナーの甘ったるい匂いが鼻腔から脳へとダイレクトに伝わって、思考に靄がかかったようになる。

あれこれ考えていられないよ。

「ほ、ほんとに？　わっ私の事だけを考えてくれてるの？　んはっ♡♡」

『身体、飛び跳ねてしまってるよ♡　かわいいなぁ……そんな子は、もっといじめたくなっちゃう。そろそろ、ここを責めちゃおうかな♡もう欲しがってそうだし』

「あっあっ♡♡　……ひゃぅぅっ♡♡♡」

自分の手なのに、他人にいじられているようなもどかしさがあってたまらない。

自演なのに、攻めと受けが自分の中で共存している。

僕は自身の欲望に忠実だから、実際のプレイに比べると、スムーズに事を運ばせようとするのは仕方がないと思う。

もう焦らせない。

『千秋♡　もうされるがままだね』

「だめだよう、あん♡　そこ弱っ……♡♡」

膝に乗せた指を、太ももへとツゥ――……と触れながら、股の付け根へと動かしていく。

ふにっとしている指ざわりの玉ぶくろを、優しく二、三回包み込むように手のひらで撫でてから、指を上へ上へと這わせる。

すると――

下着から飛び出そうなくらいに充血しているおちんちんが。

穿いていたプリーツミニスカートが、その肉の棒で突き上げられていて、女の子なのか男の子なのか、一瞬混乱する。

男の娘……。

『あーあ、こんなにしちゃって。もうバキバキじゃない』

〝私〟は裏筋が弱点。

「だめ、言わないでえ……♡　あっ♡　そんな触り方するなんて、ずるいよお♡♡」

そのままミニスカートの中で先端部を探り当て、かりかりと擦りたてる。

その動きに呼応するように、おちんちんがビクンビクンと脈打った。

カリの辺りから先端にかけて、カウパー液でとろりと濡れているのが下着ごしからでもはっきりと分かる。

『すごーい……♡　もうヌルヌルに濡れてるの、ぱんつ越しなのに分かっちゃうよ……♡♡　ほおら、こんなに糸、引いてる♡』

鏡の中の〝私〟に向かって、親指と人差し指をゆっくり開いて、間に糸の橋がかかるのを見せて微笑む。

「ん♡♡　きっ、君のせいなんだからあっ♡　知らないぃっ♡♡　そういうあなたこそ……♡♡」

そう言って、もう片方の手を太ももから這わせておちんちんに指を触れる。

「あーあー♡　私と同じじゃんっ♡♡　人の事言えないじゃない、まったくもう～♡♡」
　〝私〟は左手、〝僕〟は右手で、先っちょを指で擦りながら、ゆっくりとサオをしこしことしごいていく――。
『んんっ、や、だめその触り方はあ♡♡』
「あ、あああっ♡♡　それっ、それいい～っ♡♡」
『二人してっ♡　こえ、うわずっちゃってるぅ♡　……たまんないぃ♡♡』
　おちんちんの先っぽにそっと爪を立てながら、もう片方の手で握った指を怪しく蠢かせると、背すじを快感が駆け上っていく。
　おかしくなっちゃいそう。
　カリの段差を指の輪っかでコスコスと刺激すると、一気にこみあげてくる。
「なあに？　どういう風に触ってほしいのお？　ほら言ってっ♡　ごらん♡♡」
　物足りない。
　触れるか触れないかの刺激も気持ちいいけど、足りないよ。
　もっとしっかりと握って、しこしこしてほしい♡
『もっ、もっとお♡』
「もっと？」
『強くぅ……♡♡』
「それじゃ分からないよ♡　ちゃんとお願いしてね♡♡」
『ぼ、僕のおちんちん、しっかり握ってえ……♡　ごしごしごしごし♡　しごいてえっ♡♡　おかしく、して、えぇっ♡♡』
「よくいえたね、私の千秋っ♡　よおく可愛がってあげるねー♡♡」
『あへえ……♡♡♡』
　蕩けきった顔つき、涎が口から垂れているのにもしばらく気付かず、僕は笑顔になった。
　期待で身体がぶるっと震える。
　再び乳首に指を這わせる。
　さっきよりも、ひときわ固くなっているのが分かった。
「どう？　かりかりかりかり……♡」
『ひゃん♡　そ、それえ……♡♡』
　一段と固さを増していた乳首。
　一回り大きくなっているような気がする。
　女の子の乳首は男の子に比べて大きいから感度もいいのかな。羨ましいな、女の子に生まれていたら溺れてしまっていた気がする。
　ただでさえ、こんなに感じちゃうのに、狂ってしまうよ……。
　乳首といいクリトリスといい、おまんことといい……。
　あんな気持ちのよさそうな性器をしてるのに、女の子は性欲をオープンにしないのは何故なんだろう。不思議に思ってしまう。
　オナニーも、男の子よりも気持ちの良い行為なのだとしたら、男の子よりも快楽に耽ってしまいそうなものなのに。
「おちんちんも気持ちくしてあげるね、ふふ♡　ほおら、しーこしーこ♡♡」
『あはっ、いいっ♡　気持ちいいよお♡♡　もっともっとっ、激し

くしてえ！』

乳首責めをしながらおちんちんをしこしこすると、おしっこがしたくなるくらいの快感が駆け抜ける。

おしっこなんだか精液なんだか、分からないけど溜まっているのが上がってくる感じがする。

「もう腑抜けたお顔をしちゃって……♡　本当にかわいいなあ、千秋は♡♡」

鏡の中の〝僕〟は、ただただ悦楽を享受して喘ぐだけの人形。

鏡を見ながらする自慰は実に倒錯的だ。

自分が女の子の恰好をしつつ、おちんちんはパンパンに膨らんで固くしているなんて。

『はあっ♡　はあっ♡　んほぉ……♡♡　きくっ、きくぅっ♡　くるくるぅっ♡♡』

「自分でちんぽっ、しごいちゃってんだ♡♡　かわいいい♡♡♡」

〝僕〟をいびり抜いている〝私〟の声も上ずってきている。

おちんちんの気持ちよさは〝私〟にも十分に伝わっていたのだから。

「も、もう我慢できなひぃ♡　いっちゃうよお♡♡」

『きもちい、きもちぃぃぃ♡　んああっ……♡♡　一緒にっ……♡♡♡』

もう尿道を埋め尽くし、そこまで精液が上がってきている。

カリの部分がぷっくりと膨らんでいて、全てを吐き出そうとしている。

ちゅこっ♡　ちゅこっ♡　ちゅこっ♡　ちゅこ……♡♡

こすこすこすこすっっ♡♡　こすこすこすこす……っ♡♡♡

『〝あ〟あっ♡♡　いぐぅっっ♡　いぎゅんっ♡♡♡』

「いっひゃうぅ、千秋ぃぃ♡♡　ひっぐぅぅぅ♡♡♡」

ドビュッ♡　ビューーッッ♡　ドクッ♡♡　ドクッ♡♡♡

もうティッシュに出すとか何も考えず、出したいものを全部出す。

それしか考えられない。そこら辺に全部ぅ、そのままま散らすっ♡♡

下着の中だけでは収まらず、手を伝って白濁した粘り気のある精子が、ドロっと垂れ落ちていく。

自分のイキ顔を見ながらイクの最高……。

いっぱい、すんごくいっぱい出ちゃう♡

『ま、まだ射精るうう♡♡　もっと握りしめて全部ぅぅ♡♡♡」

「一滴残らずっ♡♡　全て出尽くすまでっ♡♡♡」

ビュクッ♡　ビュクッ♡♡　ビュルルルッ♡♡♡

ビュゥウウゥゥゥウウッ♡♡♡♡♡

『はぁぁん♡♡　でたあ……♡♡』

「あはぁ……♡♡　もう出ないね♡♡」

鏡の中の〝私〟は、指を流れ落ちようとしている精液を美味しそうに舐め上げている。

『えっちだなあ♡　本当に千秋はあ……♡　どんな味ぃ？？』
「ん、ふぅ……おいし♡　塩辛くて、ねばねばぁの……あんかけっ♡みたいだよ～♡♡」
『またやっちゃったね……♡』
「そうだね……。おねえちゃんにこの精液くさい部屋、バレちゃうよね、きっと♡」
『せめて、お化粧道具はきちんと片付けておこうね♡』
「うんっ♡♡」
　ふと時計に目をやると、何時の間にか夕方になっていた。間もなく陽夏おねえちゃんが仕事から帰ってくるだろう。
　僕はそそくさと証拠隠滅を図ったけど、ザーメンの匂いだけは、どうしようもなさそうだった。
　ザーメンティッシュ、あえてごみ箱にそのまま捨てておいたりして……♡　おねえちゃん、どう思うかなあ。
　おかずにされちゃった、なんて思うのかなあ。
　匂いを嗅がれながら使われちゃったらって考えると、どきどきしてしまって駄目だった♡

男の娘のディルドアナニーが、おねえちゃんにバレちゃった話♡

夜、姉弟団らんのひととき。

陽夏おねえちゃんが仕事から帰ってきて、夕食を一緒にとった後のひと息つける大切な時間、ソファでくつろいでお茶するのが、僕達の間でいつの頃からか始まった慣習だった。

慣れないまでも、夕食は僕が準備する日を決めていたし、僕はおねえちゃんの負担が軽くなるよう、気に掛けていた。

なんでもおねえちゃんにおんぶにだっこ、という訳にはいかないからね。

役割分担といっても、特におねえちゃんと比べて秀でた所のない僕。それでも、何かの役に立って、おねえちゃんの肩から荷物を下ろしてあげたい。

普段なら心が温かくなるリラクゼーションタイムなのだけど――

「家に入った時からね、なにか匂うな～とは思ってたんだよね」

陽夏おねえちゃんは、あっけらかんとした調子で笑う。

「私の部屋から物音が聞こえてきたから、そろりと近寄ってドアを開けたら、むわって、匂いが漂い出してきてさ♡」

それに対して僕は、穴があったら入りたい気分だった。

「うぅ……もう意地悪はやめてよおねえちゃん……」

「千秋くんは、普段から女の子と変わらない雰囲気をまとってるし、ウィッグをつけて変身するまでもないから、髪振り乱してよがり狂ってるの、よかったよ♡」

僕とおねえちゃん、お互いオナバレは経験済みだったけど、今までのは健康的な普通の（？）オナニーだったから。

おちんちんをしこしことしごいたり、クリやおまんこを指で擦り付けて気持ちよくなったりする程度の……。

おもちゃを使ったアナニーで、それも、腰を打ち付けて悦んでいるシーンを覗かれるなんて。

現行犯だったから、もう、あたふたするばかりで。

「弟のあんなことしているのを目撃して、なにもなかったかの如く当人とあれこれ談義するおねえちゃん、おかしいよう、もう～」

「無我夢中で、快楽をひたむきに追究する様子、神々しかった♡」

「おっ、おねえちゃんだって、こっそりと観察して、その、オナニーしてたじゃんっ！」

そう、この人は人の恥ずかしい姿を見ているだけじゃなく、僕のあられもない姿に欲情して、自慰行為までしていたのだ。

ちゃっかりと!!

「あははっ♡　声が出てしまったのは不覚だったね。邪魔するのは姉の行動としてどうかと思ったまでですぅー♡」

そう悔いながら、お茶を口元に持っていくおねえちゃんは、まる

で昔話の語り部のようだった。ずず……と一口すすって、ことりと湯飲みを置く。

落ち着き払っていて、後ろめたいことなど全くないといった様子。

「まったく、弟のオナニー覗いてオナニーしてる姉って絵面。どうかしてるよ……♡」

性欲にオープンな間柄とは思っていたけど、おねえちゃん、あまりにも簡単に姉弟という垣根を乗り越えてくる。僕は常識人を気取るつもりはないのに、ブレーキを踏むのに必死という感じ……。

おちょくられて満更でもないというか、変な嬉しさのようなものが込み上げてくるのは、僕がMだからなのかなあ。

まあ、僕達がシスコンブラコンの関係というのもあると思うけど。

「夢中になって腰を振り立ててたのがピタ！　って止まっちゃうんだもんなあ。あんな見物だったのに、残念！　ビデオ回しとくんだったわ～♡」

「おねえちゃんは、気持ちよくなるのでいっぱいいっぱいだっただろうから無理ですー！」

「てへ♡　たしかにねっ」

ぺろりと舌を出しておどけるおねえちゃん。

反撃に転じようとしたのに、あっさりと肯定するから手がかりが掴みにくい。まったくもう。

恥じらいというものがないのか。

「誰もいないと思ってたのに、猫みたいに気配消して密かに楽しむなんてずるすぎる。僕は、やっちゃった感半端なかったんだからね……♡」

長い溜息を吐き、湯飲みを手にする。いいお茶っ葉のはずなのに、味を感じられない。

気まずさの極地だったけど、僕の内心はどこか火照ったものになっているのも事実で、男の娘心は複雑だな、などとも考える。

「まーまー、いずれはバレちゃってた話でしょう？　悔やむんだったら最初からしなければいい訳で。ね♡」

「それはっ、そうだけどさあ……」

おっしゃる通り。バレたらバレたで、その時はその時。そう思っていなかったと言えば、嘘になるのかも。

「私は楽しかったな、一回はイけたし……っ♡♡」

「はい♡　ちゃっかりイってたよね♡　……回数的に不平等だとも言いたげだね、おねえちゃんてば」

「あ、分かったあ？　覗いてるのバレてたのに、あのときは止まらなくてごめん♡」

「ごめんなさいは僕もだよ、おねえちゃん♡　見られてるのに止まらずイクなんて、漫画みたいだったもん、ほんとうにどうかしてる♡」

「だってさ、気持ちよさそうだったもんなあ、ほんと。メスイキって言うんでしょ。連続イキしてたんじゃないの？　千秋くんは」

「……内緒♡」

「やだ、思い出してたら濡れてきちゃったじゃない……♡」

それまでの陽気な調子から一転、少し湿っぽい声音で囁くおねえちゃん。

「な、何言い出すの……。陽夏おねえちゃんなら、まあ濡らすかな……って変に納得してる自分がいるけど」
心拍数が急上昇。どぎまぎして、自分でも何を言っているのかよく分からなくなる。
胸が苦しい。
「あは♡　やばーいね、私。弟くんにこんなこと言う姉が普通いるー？的なー」
「〝まず〟いない♡」
絶対にいないとは言わない。だって目の前にいるんだもの。
「ふふっ、ま、いっか。私は洗い物してくるから、ゆっくりしてて。一人反省会でも、ね♡」
おねえちゃんは、言いたい事を言ったと思ったら、台所へと出て行こうとする。
「んもう、おねえちゃんには勝てないや」
痴態を見られた恥ずかしさはすごくあったけど、気持ちいいのはいつも通りだったしな……♡
おねえちゃんの声が聞こえなかったら、一体どこまで登り詰めていたんだろう。
それにしても。
おねえちゃんだって、イクところまでオナニーできていたんだから、今みたいに弄らなくてもいいのに。
「ねえ、弟くん」
「なあに？　改まって」
「私達、近いうちに……」
「えっ」
思わず身構えてしまう。え、言っちゃうの？
「……えっち、しちゃうかもだね♡♡」
口角を上げ、上目づかいに僕をのぞき込んでくるおねえちゃん。すべてを見破ろうとする、魔性の目だった。
「なに言ってるんだよお！」
「いいの？　いやなのー？」
「……♡」
「あははは♡　何真に受けちゃってんだか♡　かわいいなあ千秋くんは」
こんどこそ、おねえちゃんは台所へ行った。
心臓が飛び跳ねて、言葉が胸に詰まって何て言ったらいいのか分からなかった……。
ふと股間を意識すると、あれだけ楽しんだはずなのに、またおちんちんが固くなっていた。
おねえちゃんにも気付かれていたのかな……。だから、執拗なまでに煽られたのかも。
僕は、さっきまでの自分の行為を思い返していた。
おねえちゃん、思い出して濡れたって、あれ、本当なのかな。嘘ついても仕方ないか。女の子のむらむらは、自己申告する事に価値があるし♡
おちんちんが疼いて切ない。

おねえちゃんは、冗談めかして反省会でもしていろと言ったけど、熾火のようにくすぶっている性欲、どうなるか自分でも分からない――

✧　✧　✧

またおねえちゃんの部屋でオナニーしちゃった。

ドレッサーを借りて、お化粧をしてるうちに、鏡の中の自分に興奮して、つい気持ちよくなって……。攻めと受けを僕が一人芝居でやって高まるやつ、

欲しがる自分の視線に絡め取られてしまった。

このままだと、お化粧と性欲の解消手段が脳内で結びついちゃうから駄目なのに。

普通に自慰しても満足できなくなっちゃうよ。

甘い香水の匂いが淡く漂う部屋の中で、叫びながら果てちゃうなんて、いけない子だよね。自分自身とお耽美オナニーにのめり込むなんて……。

自慰の匂いが凝縮された精液ティッシュなんて証拠を、おねえちゃんの部屋のゴミ箱にそのまま捨ててしまうなんて悪いこともして……。

またオナバレしちゃいたいのだろうか、僕。

男の娘たちって、やっぱり性欲強いのかなあ……？　えっちな漫画に出てくる男の娘はピュルピュルすごくて何回も出ちゃうから、本当に。いくらでも射精る～って感じだから。

ＳＮＳでアカウントを持っている男の娘は沢山いるけど、中でも女の子みたいにかわいくて、男の子みたいに性欲に正直な娘を見かけると、気持ちを込めて、そっといいねを押す。

ウィッグをつけてお化粧もバッチリ決めて、おちんちんもしっかりと固くして、ニット地のタイトスカートを持ち上げていたりして。

それで、はにかんだ笑顔でギャルピースしてたりもするのが堪らない。手のひらを上に向けて、手首をそらせた状態でするピースサインがギャルピース。

僕自身、小顔に見える効果がある気がして、自撮りする時に好んでするポーズだし。

最高に盛れたメイクを見てもらいたくて上げたと思われる自撮りもあれば、劣情を催してしまい、見た人を変な気持ちにさせようという動画を目にすることもある。

例えば、お気に入りのキャラクターに扮して、えっちな事をしているのを見られたいだとか。画面から、そういう欲求が痛いほど伝わってきて、トロンとした気分になることもしばしばだ。

全部出し切ったつもりの自慰行為だったけど、まだ足りなかったみたい……。なんだかお尻が疼いて仕方がない。

「ひゃうんっ♡♡」

ドレッサー周りを片付けて、ひと息つこうとペタン座りしたとき。ゴリュン！　と異物が中で擦れる感覚がして、変な声が出ちゃった。

アナルプラグ……。

そういえば、挿入したままお化粧してたんだった。
使い始めは異物感がすごくてじっとしていられなかったのが、今ではすっかり馴染んでしまって……。
プラグの形に腸内の形が変わってしまったのかもしれない。
挿入いっているのを意識しはじめると、腸壁とプラグとの微妙な摩擦が感じられる。
少し奥の敏感な部分に押し当たるように身体を動かすと、気持ちよさがこみ上げて来る。おちんちんの根っこのあたりが、じわーんと疼いちゃう。
お尻の穴、どのくらいほぐれてるか、確かめてみたいな。
「んっ……ふううぅ……」
下着を横にずらして、アナルプラグを露出させる。
身体に力を入れないようにしながら、プラグの持ち手に指をかけ、柔らかく引き出すように動かしていく。出口を意識して、緩める。

ゴリュ♡　ゴリゴリッ♡　ゴリュン♡

「んふうっ、はあああぁぁあ……っ♡」
こ、擦れるぅ♡
ぜ、前立腺でぷっくらとしている部分をプラグが通過するのがたまらない♡
じくじくとした快感を伴いながら、異物を排泄していく感じがもうぅ……♡

「あ♡　はぁはぁ……もう、すこ、しぃ……♡♡」
馴染んでいるといっても、それは腸内の話で、肛門・出口はまだそこまでほぐれてはいないようだった。
僕は息みながら、持ち手に力を込めて、腸壁に傷がついたりしないように、ゆっくり、ゆっくりと引きだそうとする。

ヌプ、ヌプププ……♡

「もう♡　で、でりゅうっっ♡♡」
出口がつっぱって、少し鈍痛があるけど、抜けないほどではない。
よく『直腸の異物挿入事案』みたいな資料で、どんな大きさの何をどれくらいの深さまで挿入したか、という情報を目にするけど、目を疑ってしまう。
ほんとう、無茶やるんだから……という感想しか湧かない。お医者さんが可愛そう。
「う、うまれりゅぅ♡　うーん♡　うぅーーん♡♡　はっ、はあぁぁあぁぁぁ♡♡♡」

ズルル♡　ズ……ズリュズリュ♡　ズリュッ♡♡
……ブリュリュリュ♡　ズズ……ズリュン♡♡

「――……っ♡♡♡」
ちゅぽんっ♡♡

アナルプラグの表面がヌリュリと肛門を擦り上げ、最後は一気に……♡

ぜんぶ出たあ♡♡

「ぬ、ぬけたあ♡　あーん♡　だしちゃったぉぁ♡♡」

男の娘にとっての第一の性器……。

それは、ビキビキのおちんちん？

コリっとした乳首？

それとも……ニュルリと飲み込むお尻なのかなあ？

みんな感覚がちがって、それぞれに良さがあるから、選べって言われても選べない♡

僕は床に投げ出してあった手鏡を持ち、今プラグが入っていた所を観察した。

ぽっかりと空いた黒い空洞が見える。

アナルプラグは太いところで直径五センチ。少しずつ大きなものに取り替えて、拡張してきた。

僕いま、こんなになるほどのもの、くわえ込んでたんだ……。

えっちすぎる……。

今、指を使って、くちゅくちゅ楽しんだら、気持ちよさそう……♡

さっきは射精の快楽、今はアナルの快感を貪りたくて、うずうずしている。

おちんちんの次は、アナルまんこも……。

「別腹だもん、だから仕方ないもん。すきぃ……♡♡」

射精(だ)すのとお尻を使うのとでは、気持ちよさの受容体が違うとでも言えばいいのかな。女の子で例えれば、クリトリスと腟内の違い、みたいな？

自分で挿入れる、他人に挿入られる行為って、受け身に回ることが連想できるから好き。

受け容れることが女の子らしさだと思うから、狂おしいほどに女の子でいたいと考えている僕ら女装男子は、アナニーするのが普通なんだと考えてる。

アナルセックス、逆アナルになるよね、受けということは。

「僕、アナニー、だいすひぃ……♡」

ドレッサーの上にあった乳液を指に垂らし、まんべんなく塗って、お尻の出口……♡　入口かも♡　にも丁寧に塗り込めていく。

「指ぃ……入れるね……？」

ズブッ♡　ヌプププゥ♡♡

「んああっ♡」

中指、薬指。

ヌプンッ、ヌプヌプ……。

「あはあっ、はいってく、はいってくよお♡♡　ぎ・゛も・ぢ・ぃ〜♡♡」

でも二本だけじゃ物足りないかも。

挿入した二本の指に人差し指を添えて、飲み込ませていく。

ニュルッ、ニュルルルル♡　ニュルルルルルル……♡♡

「おほぅっ♡　これこれこれこれぇ♡♡」

ズプゥ……ゥンンン♡♡♡

「は、はいったあ♡　ずこずこしまくりアナニーすりゅうぅ〜〜っ♡♡」

最初はゆっくりと出し入れしてたけど、すぐに物足りなくなってしまう。

四つ打ちのビートをお尻の穴の中に刻み込むように――

ズチュッ♡　ズチュン♡　チュポッ♡　グヂュゥ♡

四つん這いになって、リズミカルに抜き差し……。男の娘にバックから責められているのを妄想しながら♡

陽夏おねえちゃんに逆アナル責めされちゃうのでもっ……♡

いいっ♡♡

「あん♡　あん♡　あん♡　あん♡♡　もっとっ♡　もっとついて♡

そう、そうもっとおお♡♡」

おちんちんで責め立てられながらっ♡　僕のおちんちんっっ♡♡

「しごかれてぇ♡♡　頭おかしくなりゅのほおぉぉおおお♡♡♡」

❤　❤　❤

今日もなんとか仕事を終えられた私。

他人を持ち上げるお仕事というのは体力がいる。

看護師さんは本当にすごい。患者さんに元気を与えられる力を持って、日々尽くしているのだから。

私は張り付いた笑顔のこわばりを微調整しながら、帰路を早歩きで急いだ。

千秋くん♡

千秋くんの「おかえり♡」が、全てを癒し去ってくれる。

「ただい――」

ドアを開けた瞬間、生暖かい空気が鼻腔をくすぐる。千秋……くん？

「……ぁ……ぁぁ……っ♡」

待って、この、喘ぐような吐息混じりの声は……。

さっきの匂い、どこかで嗅いだことがあると思ったら、千秋くんの部屋で、千秋くんが……しこしこしていた時の匂いだ。

そう、どこか青臭い、精液の匂い。

その匂いが、マンションの廊下に立ち込めている……。

間違いない。

千秋くん、オナニー……してるんだ……。

「ん、んっ……んほ♡　ほおおっ♡」
胸が高鳴る。トクン、トクンと拍動が聞こえてくるみたい。
千秋くん、夢中になってる。おほ声まで出しちゃって。
「千秋くぅん……♡」
そう囁くと同時にとろんとして、身体の中から熱いものが溶けだしたのが分かった。
濡れた……。もうこれ条件反射だ、抗えない。たまたま生理前で、仕事が手につかなかったんだ。
ムラムラを、トイレで宥めたりもしたくらいだったのに。

チュク……クチュ……♡

私は内股を湿らせつつあるぬるみを感じながら、音の聞こえる元へと足音を忍ばせて進む。
気づかれないように、そっと。
もどかしい。もどかしいけど、バレてはいけない。
自分を抑制するように、生唾を飲み込む。
千秋くんの声は、私の部屋から聞こえてくるようだ。
「ほおお♡　あ、あんっ♡　いやあ、んっ♡」
まったく♡
どんなオナニーしたら、こんなに乱れちゃうんだろう？
人の部屋であんあん、私がもう帰る頃だって分かってるハズなのに。
幸い、ドアはほんの少しだけ開いていた。
私は廊下に四つん這いになって、そろそろと移動していった。
太ももを前後に動かすだけで、背筋をゾクゾクと電気のような刺激が走る。
やだっ、もうベッチョベチョになってるじゃない私……。
ねえ、千秋くううん♡　私、もうだめみたい♡
音を立てないよう、細心の注意を払いながらドアに手をかける。
「あん♡　あはっ、〝いっいいっ♡♡〟」
実際にオナニーしている現場はまだ目にできていない。いないのに、私はもう我慢出来なくなっていて、股間のぷっくりとした突起に指を這わせようとしていた。
弟君の女の子みたいな喘ぎ……かわいいよお♡♡
千秋くん、グチョ濡れだよお……♡
千秋くんのえっちな声聞いてるだけで、おねえちゃん、おかしくなっちゃった……。
お互いオナニーしてる所を目撃したよね？　あれ、わざとじゃなかった……？　私はね、わざとだったんだよ、千秋くん。
確信的オナバレだったって、訳……♡
左手はもう股間から指を離せなかった。
だから四つん這いのまま右手をドアにかけ、ゆっくりと開いていく。
性感を得ながらの動作だったから、バランスを崩さないか、ハラハラだった。

ドアを五センチくらい開くと、千秋くんの背中が見えた。
私は目を見張った。
……っていうか千秋くん、四つん這いで、お尻をこっちに向けてる……。
穿いてるミニスカの裾が、太ももに当たったり、ふわりと浮いたり。ゆらゆらと揺れている。
「あっ♡　あん♡　はあっ♡　んっ♡♡」
裾の揺れるタイミングに、千秋くんの喘ぎ声がシンクロしてる……！
よく見たら、股間で手首がカクカクと動いていた。
三本の指を、ズボズボズコズコ♡
出し入れしてよがってたんだ♡
アナニーしちゃってるーーー♡♡♡
千秋くん、指の動きに合わせて腰がガクガクし始めちゃったあ♡♡
私は急激に高まり、クリを撫でていた指を前後に擦り付ける。
「……っ、くっ♡♡」
危ない、声が漏れちゃいそう～♡
ドアの隙間から溢れる光が、ちょうどおまんこに当たっていた。
片手を後ろについて、腰を突き出すよう、パッカリとしたM字開脚。ぬらぬらとした愛液まみれの状態が分かる。
もう無理、イキたくなってきたっむりむりむりむりぃ～～♡
グチュ♡　グチュ♡♡　グチュッ♡　グチュッ♡♡
いやっ、いやあっ♡♡　まんこ音でオナバレきちゃっ♡　きちゃうよおお♡♡　でももう駄目ぇ♡
止められなひっ♡♡♡
「っぁ、はぁはぁ……千……くぅ……ん♡」

❤　❤　❤

声に出して言いたい日本語というのがあるけど、自分を高めるために声を使っていくのは大事だというのは、ドレッサーオナニーで体感済み。
それに、ボイトレがここにきて活きている。
女の子の声になれているのが最高の多幸感を与えてくれていた。
「んあっ♡　ほっ♡　ほおっ♡　お〝お〝っっ♡♡」
僕は、最初に火を付けた後は自然に声が出ていた事に気づいた。
普通に声♡　出るようになったあ♡
「指でアナルほじくりぃ♡　きもちよすぎなの♡　もっとお♡　もっと太いのでっ♡♡　おん♡♡　突いてえっ♡♡♡」
前立腺を中指でゴリゴリと責めると、おしっこみたいなのが込み上げて♡
何かが押し出されておちんちんから垂れて出た。
さきっちょから床まで糸を引く♡
「おっ、おちんちんまでヌルヌル……ぎも〝ち～～♡♡」

シコシコを止めないとっ、そのままぶちまけてしまうっ♡
たしかっ、確かおねえちゃんのベッド♡
その枕の下♡♡♡
僕は、指をお尻に挿入れたまま、這うように移動した。
枕の下にもう片方の手を差し入れて探る。
「あったあぁぁっ……♡♡」
ブルンとしたシリコンゴムの手触りが♡♡♡
「ふっ……太っ……♡♡」
前に……見つけた時よりも太くなってる……。
さっきのアナル責めに使ったプラグと同じくらいの太さ♡
カリの部分はあと一回りくらいおっきい……♡♡
「こわ♡♡♡」
透明な素材が使われていて、ピンクで卑猥〜っ♡♡
こんなディルドを枕の下に入れてるなんてぇ♡
挿入れて遊んでるなんて陽夏おねえちゃん♡♡
えっちすぎるよ♡♡
おねえちゃん……もう生のおちんちん、卒業しちゃうの……？　あったかおちんちんより、ぶっといディルドの方が好きなの……？
こんなの僕、入れられるのか、な……。
でもおねえちゃんができるならっ♡　僕も入れちゃいたい♡♡♡
「ん……よいっしょっ……と♡」
ディルドに付いている吸盤を使い、床にくっつける。
そして、乳液をドロドロになるまで垂らす♡

「やだ、お射精してるみたいっ♡♡　ヤバいよ〜♡♡♡」
手コキするみたいに手首をつかってシコシコと乳液を伸ばす。カリの段差のあたりは特に入念に……。
んふ、まるで、本当におちんちんを手コキしているみたいだ♡
「挿入れ……るね……♡　……はんんっ♡♡」
穿いていたTバックをずらし直して、プルプル揺れていたディルドを指で持ち、お尻の穴にピタリと合わせる。
出口が拡がるように息みながら、腰を落としていく……。
ピュゥーー……♡
あっ♡　いきみ過ぎておしっこ出たっ♡
ヌププ……♡
「あん♡　さきっちょお……♡♡」
広がったお尻の穴よりも大きい、太い♡♡
どんどん太く、なっていく♡
こんなの入らな……??
「ん♡　んおおお……♡♡」
ゴリゴリゴリゴリ……♡♡
……ギチチチ……♡　ゴリュ♡　ゴリュン♡♡♡

「えっ♡　うそおお♡♡　はあ、はあ、はあああ……か、かり……のみこんだあああ♡♡♡」
ズブブブ……♡♡
あとは……♡　完全に突き当たるまで、挿入れるだけ♡♡♡
締まろうとする穴を脱力させ、一気に腰を下ろす。
「んほぉぉ〜おおぉおおお〝お〝お〜〜〜♡」
ズリュリュリュリュリュッ……ズブン♡♡♡
「ふぅぅ〜〜〜ん♡♡♡　ぜんぶ……♡　挿入いったあ〜♡♡」
挿・入・完・了。
「ほぉっ、騎乗位になって、おちんちん飲み込んだあ♡　……この達成感やっぱい♡♡　じゃあ♡　動くね♡♡♡」
パチュ♡　パチュン♡　パチュン♡　パチュン♡
ブリュッ♡　ズリュ♡　ゴリ♡♡　ズバン♡♡
「あはっ♡　んおっ♡　ほっ♡♡　ほお♡♡　〝んほ〝おっ♡」
こんなに太いディルド、飲み込めて嬉しい、おねえちゃんと一緒のディルドなのがっ、僕を更に高みへと持っていくう♡
でも♡♡
ディルドに跨がって夢中で腰を振っている所っ、おねえちゃんに見つかっちゃうよ♡♡
見つかってもいい、いいっ、いいよ、おねえちゃんっ♡♡♡
「あっ♡　あなりゅ♡　きもひぃぃっ♡♡」
ズリュン♡　ズボッ♡♡　ズブン♡♡　グボォッ♡♡♡
「んぐふぅ〜♡　あんっ♡　はあっ♡　おっ、おっ♡♡　んほおおっ、めっ♡　メスイキすりゅうううう♡♡♡」
視界がホワイトアウトして、その中をキラキラと星が瞬いているような♡♡　本当に真っ白、なんにも考えられない♡♡
イグゥ〜〜〜〜〜♡♡♡
でりゅでりゅでりゅぅぅ〜♡♡♡
「お♡　おっ♡　おおっ♡　〝オ……♡♡」
もっ、もう♡　こんなの無限搾精装置じゃん♡　はあんでりゅうう♡♡♡
「ああああっあひっ、ひぃぃっ♡　ちあきくぅん♡♡　〝いっぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡♡♡」
えっ……おねえちゃん？……ええっ?!……♡♡
何か聞こえたっ、いくとかっ♡
なにこれえ♡♡♡
僕が思わず振り向いた先には、大股M字開脚で夢中になってる陽

夏おねえちゃん……!!
取り繕う事もできず、腰をガクガクと震わせ、歓喜の声を上げて達している♡♡♡
快楽を貪る指を止める事もできず、気をやってしまってる♡♡
だめだめらめっ、もっていかれる〜♡♡
「おねえちゃんっ♡　ああっ、んほおぉぉおおぉおお♡♡♡」
「ちっ、千秋ひい……っ♡♡♡♡♡」

ビュゥゥゥッ♡♡　ブビュルルル〜ッ♡♡♡　ビューッ♡♡　ビューッ♡♡♡　ビュゥゥゥ〜♡♡♡♡
プシッ♡♡　プシャァァァアアアアアアアア♡♡♡♡

「みっ、見てたなんてえ♡　言ってよおおおお♡♡」
「ごめっんん♡　ちあき、く、ん♡　イってるのおお♡♡♡　だからあ♡　許してええええ♡♡」

✧　✧　✧

僕は股間をさすりながら、さっきの一部始終を思いだしていた。
完全に変な気分になっている。今日はもう僕、おかしいよお♡
「やっ、弟君♡　励むねえ〜〜♡」
台所から帰ってきたおねえちゃんが、開口一番おちょくってくる。
「ちょっ、おねえ、これは違っ♡」
「何が違うのよ……えいっ♡♡」
「だめだめらめえっ♡　そんなの、いっちゃうよ……♡♡」
おねえちゃんが、いきなりぎゅっと握るから、またイキそうになっちゃった。
「今日はね、おあずけにするの……ねえ千秋くん」
「なに……？」
「デートしよう」
「いいの？　あんな事があったのに……？」
「あったからだよっ♡　もう、二人とも、収まりつきそうにないもん」
零れるような笑みは、欲情しているのを誤魔化すためなのだろうか。おねえちゃん、瞳は潤んで頬を紅潮させていた。
「陽夏おねえちゃん……キスしたいよ♡」
たまらず欲望を口にすると、おねえちゃんは僕の口を閉じるように、唇に人差し指を押し当ててきた。
お預けという事らしい……。
「なにが起こるかお楽しみ会、近々やろう♡」
「う……せつない」
「せつないのは、おんなじ♡　まあ私はオナニーやめないけど♡」
「そんなあ、生殺しすぎるよ♡」
おねえちゃんのオナ声を夜な夜な聞かされる気持ちにもなってほしい。
頭おかしくなっちゃう♡

僕とおねえちゃんの共用物になってしまった、あの極太ディルドで……ごくり♡♡

「千秋くんに、あんなすごいけつまんこグチュグチュオナニー見せつけられたら、どうしようもないじゃない♡　猿になっても仕方ない♡　まあ、千秋くんもどうしようもなくなっちゃったら、夜這いしておいで♡　気分次第で相手になるよん♡♡」

「何日保つかなあ……もう～♡」

「ふふ、見物だねえ。乳首イキは許可する♡」

「はあ～い♡」

悶々とした気持ちを抑えきれないまま、想いを馳せる。

次のおねえちゃんのお休みは……いつだろう……。

ううー、待ちきれないよお……♡♡

おんなの子よりも
女らしく
でも女の子とは
少し違う
そんな娘達の
ちょっぴりえっちな
短編集です。

らぶらぶハートな物語
詰め込みました

にゃこ
いずる
花園ろぉず